

アナフィラキシー発症時の対応

異常に気付く
(発見者)

【異常(アレルギー)を示す症状】

全身の症状 : 意識がない、意識もうろう、ぐったり、尿や便を漏らす、脈が触れにくい、唇や爪が青白い
呼吸器の症状 : 声がかすれる、犬が吠えるような咳、咳、息がしにくい、のどや胸が締め付けられる、ゼーゼー、ヒューヒュー
消化器の症状 : 腹痛、吐き気、嘔吐、下痢
皮膚の症状 : かゆみ、じんま疹、赤くなる
顔面・目・口・鼻の症状 : 顔面の腫れ、目のかゆみや充血、まぶたの腫れ、くしゃみ、鼻水、鼻づまり、口の中の違和感、唇の腫れ

◇大声で応援を呼ぶ
(近くの児童生徒に他の教職員を呼ぶように伝える)

発見者が行うこと

- ① 子どもから目を離さない、ひとりにしない。観察)
- ② 助けを呼び、人を集める。
(大声または、他の子どもに呼びに行かせる。)
- ③ エピペンと内服薬を持ってくるよう指示する。
○ 管理者が到着するまでにリーダー代行となる。
○ 薬の内服介助、心肺蘇生やAEDの使用

教職員の動き

校長・教頭 等

- 現場に到着次第、リーダーとなる。
- それぞれの役割の確認および指示
- エピペンの使用または介助
- 心肺蘇生やAEDの使用

教職員 A (準備)

- 「食物アレルギー緊急時対応マニュアル」を持ってくる。
- エピペンの準備 (使用・介助も含む)
- AEDの準備 (使用・介助も含む)
- 内服薬の準備

教職員 B (連絡)

- 救急車を要請する (119番通報)
- (管理者を呼ぶ)
- 保護者への連絡
- さらに人を集める (校内放送)

他の教職員 (記録)、(その他)

- 観察を開始した時刻を記録する
- エピペンを使用した時刻を記録する
- 内服薬を飲んだ時刻を記録する
- 5分毎に症状を記録する
- 他の子どもへの対応
- 救急車の誘導
- エピペンの使用または介助
- 心肺蘇生やAEDの使用

緊急性が高いアレルギー症状はあるか？(5分以内に判断)

【全身の症状】

- ・ぐったり
- ・意識もうろう
- ・尿や便を漏らす
- ・脈が触れにくい
- ・または不規則
- ・唇や爪が青白い

【呼吸器の症状】

- ・喉や胸が締め付けられる
- ・声がかすれる
- ・犬が吠えるような咳
- ・息がしにくい
- ・持続する強い咳き込み
- ・ゼーゼーする呼吸
(喘息発作と区別できない場合を含む)

【消化器の症状】

- ・持続する強い(我慢できない)お腹の痛み
- ・繰り返し吐き続ける

1つでもあてはまる場合

ない場合

- ① ただちにエピペンを使用する
(エピペンの使い方参照)

- ② 救急車を要請する(119番通報)

- ③ その場で安静にする
(立たせたり歩かせたりしない)

- ④ その場で救急隊を待つ

- ⑤ 可能なら内服薬を飲ませる

★ エピペンを使用し、10～15分後に症状の改善が見られない場合は、次のエピペンを使用する(2本以上ある場合)

★ 反応がなく、呼吸がなければ心肺蘇生を行う

(心肺蘇生とAEDの手順参照)

- ① 内服薬を飲ませる

- ② 保健室または安静にできる場所へ移動する

- ③ 5分毎に症状を観察し、緊急性が高いアレルギー症状の出現に注意する

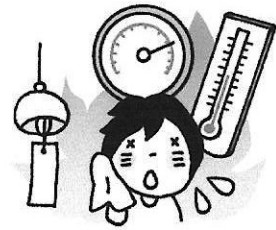
安静体位



吐き気や嘔吐がある場合は、嘔吐物による窒息を防ぐため、体と顔を横に向ける。
(呼吸が苦しくて仰向けになれない場合は、上半身を起こして後ろに寄りかからせる。)

救急隊へ

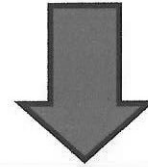
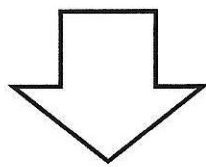
<熱中症対応マニュアル>



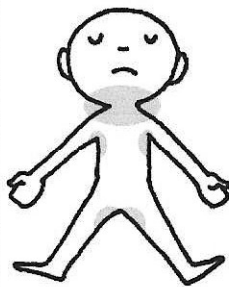
熱中症の疑い

- ☐ 立ちくらみ
- ☐ めまい
- ☐ 筋肉痛・こむら返り
- ☐ 大量の汗
- ☐ 頭痛
- ☐ 吐き気
- ☐ ぐったり感（虚脱感）
- ☐ 疲労感

- ☐ 意識障害 呼びかけに反応おかしい
- ☐ 高体温 体に触れると熱い
- ☐ けいれん
- ☐ 運動障害 まっすぐ歩けない



- ①涼しい場所へ移動し安静に。
- ②脱衣・冷却をする。
- ③十分な水分と塩分を補給する。

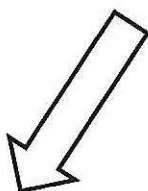


氷のうなどで、首筋、わきの下、足のつけ根を冷すのも効果的。ただし、皮膚全体を霧吹きや濡れタオルで冷やすときは常温で！！

119 番 救急車要請

応急処置は同じ

☆意識障害がある場合は
無理に水分を与えない。
気道に入る危険性あり



回復

容態が急変することもあるので様子を見る。
運動は中止し、保護者へ経過を説明する。
必要であれば病院受診。

- ・回復しない。
- ・自力で水分補給できない。

医療機関へ搬送

熱中症予防対策



☀ 「水分を」こまめにとろう

のどがかわいていなくても、こまめに水分をとりましょう。スポーツドリンクなどの塩分や糖分を含む飲料は水分の吸収がスムーズにでき、汗で失われた塩分の補給にもつながります。



☀ 「塩分を」ほどよく取ろう

過度に塩分をとる必要はありませんが、毎日の食事を通してほどよく塩分をとりましょう。大量の汗をかくときは、特に塩分補給をしましょう。ただし、かかりつけ医から水分や塩分の制限をされている場合は、よく相談の上、その指示に従いましょう。



☀ 「飲み物を」持ち歩こう

出かけるときは水筒などでいつも飲み物を持ち歩き、気づいたときにすぐ水分補給できるようにしましょう。



☀ 「休憩を」こまめにとろう

暑さや日差しにさらされる環境で活動をするときなどは、こまめな休憩をとり、無理をしないようにしましょう。



☀ 「熱中症指数を」気にしよう

携帯型熱中症計やテレビ、Webなどで公開されている熱中症指数で、熱中症の危険度を気にしましょう。